

第4章 論考

1. 大坂城築城にかかる小豆島石丁場の所在地と石材輸送

橋 詰 茂

(1) はじめに

元和6年から開始された大坂城再築城は、三期にわたり西国諸大名の公儀普請として行われた。その際に大量の石材が必要となり、諸大名は各地に石丁場を求めた。その一つが小豆島である。小豆島の石丁場に関しては、残石に注目し大坂城築城との関わりが語られてきた。だが築城終了後の島石や石丁場についての研究は見られない。また、現存する石丁場跡が大坂城築城期の石丁場なのか、築城後新たに開かれた石丁場なのかが、明確に区分されているとは言い難い。にも関わらず、あいまいなまま大坂城築城時期の石丁場としている。諸大名の石丁場跡すべての所在地の確定はできていない。それは史料上に石丁場名が記載されていても、その所在地が不明であったり、遺構が残っていないため比定できないものがある。逆に遺構らしきものが見つかっても、史料上に見えないため当該時期のものであるか否かが明らかに出来ない。文献資料と現地踏査を組み合わせた調査により、それがある程度は明らかにすることが可能となる。

本稿では、石丁場の所在地と大名について再検討し、島代官小堀政一と庄屋が果たした役割を検証する。そして、大坂城築城期とそれ以降とに時期区分を試みようとするものである。また、各石丁場で切り出された石材や、石船での輸送の状況について検証する。

(2) 石丁場を拓いた諸大名

まず、最初に小豆島に石丁場を拓いた大名について見てみよう。代表的な大名として、筑前福岡藩主黒田氏、伊勢津藩主藤堂氏、肥後熊本藩主加藤氏、豊前小倉藩主細川氏、豊後竹田藩主中川氏、出雲松江藩主堀尾氏、筑後柳川藩主田中氏、肥前佐賀藩主鍋島氏などである。

この中で鍋島氏に関しては、今までほとんど知られていない。ただ残存している史料を検証すれば、豊島の家浦と甲生浦に石丁場を求めていたことを知る。元和7年と推定できる小堀政一書状に、鍋島勝茂が石丁場を所望する旨を小堀へ申し入れたため、家臣の長屋木工・大橋金右衛門と豊島庄屋に渡すよう指示した内容が記されている。そして指示を受けた長屋・大橋が土庄村庄屋にその旨を指示している。豊島の石丁場は本来は豊後竹田藩の中川氏に渡るべきものであった。だが鍋島氏の手に渡ったため、中川氏は小堀の家老と交渉して「めくろ」という所に石丁場を確保した。めくろとは小海村の女風呂のことであり、以後中川氏は女風呂石丁場から石を搬出している。

鍋島氏は豊島に、中川氏は小海村の女風呂に石丁場を得ることができたが、大名同士の石丁場の獲得を巡る様相が克明に浮かび上がってくる。

小豆島に石丁場を希望する大名は、まず小堀に申し入れて了解をとる。その後小堀は出役の下代と庄屋に石丁場を渡すよう指示する。ただ、石丁場を渡すにあたりいくつかの条件がつけられた。それは以前に他の大名に渡していないこと、境目などの入組がないこと、地元の百姓の迷惑にならないこと、以前に大名へ渡した石丁場へ入会がないこと等である。これらのことに入念を入れるよう指示している。つまり小堀の許可無く大名は石丁場・石の扱いは出来なかった。また、島庄屋の関わる石丁場への根回しが必要であった。小堀は大坂城作事奉行として絶対的権力を所持するのである。

中川氏が石丁場を拓いた小海村には、小倉藩細川氏も石丁場を拓いている。細川氏は小豆島と塩飽に石丁場を拓いていた。「元和七年塩飽・小豆島御仕置石数之覚」によれば 881 個が小豆島から、3252 個が塩飽から切り出されている。塩飽での採石が多く、重点を塩飽に置いていたのであろうか。小海村における細川氏の石丁場だが、明暦頃の「小海村石数之覚」によれば、中川氏の女風呂石丁場とともに、北山・とひかす・おく谷・西ノ通・宮ノ上浜 2 箇所の石丁場を所持していた。そしてそこに残された石の数が 1231 本記されている。

また、同史料に「ちぶり 松平右衛門殿分」と記されていることに注目したい。松平右衛門とは黒田忠之である。黒田氏の石丁場がちぶり（千振島）に存在したこととなる。文献上にちぶりの記載はこれだけであり、この石丁場がいつ拓かれたかは明らかでない。千振島は土庄町小江地区の海上 1 km ほど沖合にある。調査の結果採石痕跡を確認したが、早い段階から近現代まで採石が行われていたことを知る。従来千振島には残石がないといわれていたが、島の南に位置する場所から、大型の矢穴を持つ石を確認した。またその正面の海上に位置する三カ所の岩礁の一つであるナカノソワイに大きな矢穴 22 個が一列になって残されている。両者は非常に近い位置にあり、一連のものとして考えることが重要である。以上のことから、大坂城築城期に採石が行われていた可能性が考えられる。他の史料に黒田氏が千振島に石丁場を所持したという記録は見ない。本来は他の大名の石丁場であったのを細川氏の島からの撤退に伴い、黒田氏が千振島へ進出して確保した可能性もある。小江地区は小海庄村屋の管轄下であるため、この記録に記されたのである。詳細は第 3 章千振島の調査を参照されたい。

黒田氏の石丁場は、すでに元和 7 年に島の東海岸部岩谷に北は亀崎南はしいの木の範囲で拓かれた。現在、八人石丁場・豆腐石丁場・亀崎丁場・天狗岩丁場・天狗岩磯丁場・南谷丁場を併せて岩谷石丁場と称して、国史跡に指定されている。どの程度の石を切り出したかは明らかでない。だが、大坂城築城が終えた後は、番人小屋を置いて幕末まで厳重に監視した。明暦 3 年の「小豆島石之目録」を見ると、岩谷・黒崎・小海・福田・家浦・大部の六カ所の石丁場名と、それぞれの石丁場を所持した大名と石丁場に残された石の数の明細が記されている。これによると、松平右衛門佐（黒田忠之）の岩谷石丁場では 457 本の石が残されていたことがわかる。年代は下るが、文久 3 年の「御用石員數寸尺帳」によれば、654 個のうち 431 個は海辺までの道のりに存在した。この史料は、大坂湾沿岸で砲台を建造するにあたり、小豆島の石を使用するために残されている石を調査したものである。明暦期の石数とあまり変わらない数の石が残されていた。番人による厳しい監視の結果であろう。現在岩谷石丁場に大量の石が残されているのは、厳重な監視により島外へ運び出されなかったからである。

藤堂氏は福田村に石丁場を拓いている。「小豆島高反別明細帳」によれば、西谷・東谷・栃明地・鯛網代の四カ所の石丁場を見る。東谷・西谷は山中に拓かれ矢穴列のある石が残っている。一方栃明地・鯛網代は海岸線に拓かれた場所にある。矢穴石が残されており、近年藤堂氏の刻印石が発見されたことから、石丁場の位置は明らかにされた。

大部村には堀尾氏が石丁場を拓いたが、場所は判然としない。ろくろ場跡がある海岸線に矢穴石を見るが、いずれも新しい時期のもので、当時の遺構を示すものはない。ただろくろ場跡から少し西へ行った箇所に流れる川の上流に矢穴石があり、分銅の刻印が刻まれた石を見たという古の話が残っているが、1970 年代の台風による災害で流失し、今は見られない。その付近が堀尾氏の石丁場であったと推定する。現在は小型の矢穴石が残るだけである。また、その付近の谷筋の下部に同時期の台風により矢穴のある巨石が落下していた。その山手に石丁場が存在したと推定できるが、遺構は確認できていない。

石場地区には「田ちくこの」と刻まれた石がある。柳川藩主田中筑後守忠政を指すが、文献上には見当たらず詳細は不明である。同様の刻印石が大坂城にもあり、田中氏が島に石丁場を拓いたことに間違いは無い。だが、元和6年8月に忠政は病死し、田中家は廃絶したため採石は中止されたであろう。刻印石は矢穴跡がない自然石である。1976年の台風による土砂崩れにより、石丁場跡は流失した可能性が高い。刻印石はその後海岸近くに移動して設置された。境界を示す石と考えられる。

ここで最も注意すべきは、加藤肥後守（忠広）である。加藤家の石丁場は土庄町の千軒・小瀬原石丁場が県指定史跡となっているが、指定範囲及びその根拠は明らかで無い。管見の限り文献上に千軒・小瀬原なる名称は見えない（小瀬の名称は後述のように見る）。遺構のある地名を採ってそのような史跡名にしたのである。詳細については後述する。

（3）石丁場の変遷

石丁場を所持していた大名とその石丁場跡について再検証をしてみよう。大名と石丁場の関係を示した史料として明暦3年の「小豆島石之目録」（以下、石之目録と略す）がよく用いられている。注意しなければならないのは、ここに示された石丁場がそのまま大坂城築城期の石丁場跡であるか否か、また石丁場所持大名の変更はないのか、である。従来はこのことを十分に検証しないまま、ここに記載された石丁場・大名を大坂城築城時期のものとあてはめてきた。「石之目録」の記載について再検証が必要であろう。

小海村の女風呂に石丁場を拓いていた中川氏は、小海村では記載されず大部村にて中川山城守として記載を見る。また同村には松平出羽守も石丁場を所持している。中川山城守は竹田藩主中川久清、松平出羽守は松江藩主松平直政である。

寛永17年と、すでに大坂城普請から長年たった後だが、松平直政が小豆島で石丁場を求めたため、小堀から土庄村と大部村の庄屋に対して書状が出される。これは、石丁場は当分の間必要ないが、公儀御普請があった時に備えてのために確保使用としたのである。寛永年中の江戸城普請掛りに鍋島信濃守勝茂と松平出羽守直政が参画している。このことから石丁場の確保は大名にとって重要な事項であった。大部村石丁場は大坂城築城期には堀尾忠晴が所有していた。忠晴は寛永10年に死去し跡継ぎがいなかったため堀尾家は断絶する。その後同15年に松平直政が松江城に入る。直政は慶安元年からの江戸城西の丸普請に参画しているが、いつ公儀普請が行われても対応できるように準備をしておかねばならなかつた。忠晴が拓いていた石丁場は直政が公儀普請に備え求めたのである。

大名が改易・断絶した場合、その石丁場は新藩主が引き継いだのである。ただその際には島を統治している小堀の了解が必要であった。以上から大部村の松平出羽守直政の石丁場は、寛永18年以後のものであることが明らかである。

大坂城築城期には小海村に中川久盛が石丁場を拓いていたが、大部村には堀尾がいたため、久盛の丁場は無かったであろう。久清は山城守に寛永12年に叙任されているところから、もし石丁場を持つにしてもそれ以降である。目録には久清の所有になっていることは、中川氏は堀尾氏の滅亡後、大部村に丁場を拓いたと考えられる。だが、両氏の石丁場が大部村のどこにあったかは判然としない。

加藤氏の石丁場は、「土庄村石場改帳写」によれば柳木谷・水か浦・東瀧・西瀧・小瀬・じや谷・大かけ・つぶ石・九だてといった九カ所を見る。その内つぶ石・九だては商丁場と記載されている。明暦の段階で、旧加藤石丁場は商丁場として存在していたことを知る。商丁場は土庄村庄屋の笠井家が管理していた。この記録は前述の小豆島石之目録と併せて作成されたものと考える。九カ所の石丁場がどこにあった

かは判別していない。現地踏査の結果、柳木谷・水か浦・東瀧・西瀧は千軒石丁場地域に比定できる。千軒石丁場の東に柳集落があり、そこを流れる柳川の上流に矢穴を持つ石が存在しており、柳木谷はこの地域を指すと考えられる。水か浦は同名の川が流れており、その上流と推定する。上流に遺構は見ないが海岸線の岩場に矢穴の遺構を見る。千軒漁港から西瀧川上流の谷筋には大きな矢穴を持つ石があり、その地域に比定できる。東瀧は西瀧の東位置し、千軒川の上流域ではなかろうか。石の目録では、「黒崎西東」と見えるが、黒崎岬を境に東西に石丁場が拓かれていたことを示す。指定史跡千軒丁場から近い海岸線に位置する場所に黒崎なる岬があり、黒崎沖にろくろ岩と呼ばれる岩が存在した。これは船積みのためのろくろを据え付けた岩といわれているが、今は見ることができない。また以前は指定地のすぐ近くまで水路が入り、船継ぎと呼ばれる石抗があり船が係留できたという。千軒丁場一帯を黒崎と称したのであろう。

時代は下がるが承応4年（1655）に大坂住吉大社造営に小豆島の石が使用されたが、それらの石はつぶ石・大かけ・じや谷から切り出された。また西浦なる地名を見るが、西浦は特定の石丁場を指すのではなく、つぶ石・大かけ・じや谷が存在する一帯を包括する名称として使用された。島の西部地域を西浦と称している。現在の小瀬原石丁場地域に比定する。先の目録に見る小瀬は小瀬原を指すと考えられるが、つぶ石・大かけ・じや谷・九だての場所は明らかで無い。小瀬原石丁場跡から山手へ登ったところに祀られている石鎧神社の奥にある巨石の上部に大型の矢穴が残されている。これは石丁場の範囲を示す目安になる。

一方、小瀬原石丁場の北側谷筋の海岸線に時代的には新しいが矢穴石が見られる。そのことから、その付近一帯に石丁場が存在したと考えられる。旧加藤氏の石丁場九力所すべてが大坂城築城期の石丁場であるか否かは判断できないが、石の需要に伴って商丁場へと変遷していったことは間違いないだろう。

（4）石材の切り出しと輸送

小豆島からの石材の搬出はどれくらいあったのか。それを明確に示す史料はない。前述の「元和七年塩飽・小豆島御仕置石数之覚」によれば、小海村には4名の奉行が2名ずつの組になり、採石を行っている。竹内吉兵衛・澤形右衛門組は72個、嶋又左衛門・佐藤安右衛門組が809個、併せて881個の石を切り出している。嶋・佐藤組の採石数は、現在残石公園や北山石丁場にある残石に刻まれた「八百九内」と一致している。この刻印石は嶋・佐藤組による切り出されたものであろう。「塩飽小豆島御仕置石之覚」によれば、7年に採石された881個の石は318個が大坂へ輸送された。残された500個以上はいつ搬出されたかは明らかでない。むしろそのまま残されたと推定できる。細川氏の採石は小豆島から塩飽へと重点が移っており、9年頃には中止し撤収したと考えられる。

同じ小海村で石丁場を拓いていた中川氏は、草刈九郎右衛門と小原九右衛門を奉行として小豆島へ派遣したが、国元へ現地の状況を逐一報告し、指示を仰いでいる。それによると、7年10月18日から11月13日まで大角石9、大角脇石7、大脇石46、三口で62個の石を切り出している。また藤堂氏は福田村の石丁場で2月から11月朔日までの期間で450個を、堀尾氏は大部村で8月10日から11月13日までの期間で170個の石を切り出している。中川・堀尾氏は短期間で必要とする石を切り出し、その後御影へと移動した。

鍋島氏は豊島で石丁場を拓き、石の切り出しを行ったようだが、詳細は不明である。一方、土庄村で石丁場を拓いていた加藤氏だが、「加肥後守殿戸庄村当年ハ石わり不参候」と、この年には石の切り

出しを行っていない。両名の報告書に黒田氏に関する記事は見ることができない。他の文献にも黒田氏の石材搬出状況を示すものがないため、明らかに出来ない。

諸大名の採石にかかる人数は、藤堂氏が 700、細川氏 500、堀尾氏 5 ~ 600、中川氏は 600 人ほどを用いていた。中川氏の場合採石にかかる経費として、日用一人につき 8 分宛で御影より安価であった。他の石丁場でもほぼ同額と考えられる。では石の値段は如何ほどであったろうか。元和 7 年に女風呂石丁場で切り出された大石の値段が残されているが、角石が長さ 1 丈面 4 尺四方で銀 460 勘、付石は長さ 9 尺面 3 尺 5 寸四方で銀 186 勘、長さ 8 尺面 3 尺 3 寸四方で銀 163 勘、長さ 7 尺面 3 尺四方で銀 148 勘、長さ 6 尺面 2 尺 5 寸四方で銀 125 勘であった。他の石丁場での石の値段も同額程度であったろう。

このように切り出された石材は、どのようにして大坂へ運ばれ陸揚げされたのであろうか。

7 年 7 月に小海村中川氏の石丁場から大坂へ運ばれた石は「八間屋」で陸揚げしている。「八間屋」とは、八軒家とも書き、現在の大阪市東区の天満橋と天神橋の中間にあたる場所で、淀川河川の中核となる港があった。大坂城にも近く、陸揚げには最適の場所であった。また 11 月に運ばれた石は、「でんぼう」で陸揚げされた。「でんぼう」とは、現在の大阪市此花区伝法で淀川下流沿岸に位置し、古くから西国の玄関口の港として栄えた場所である。現在小公園に河川整備事業の際に引き上げられた矢穴石が数個設置されている。陸揚げ地が異なるが、八間屋から伝法へ陸揚げ地が移動したのであろうか。八軒家・伝法に運ばれた石を積んだ船の規模は記されていないため明らかでないが、寛永元年に中川氏が輸送した際には、30 人乗りの船 2 艘で石を輸送している。その後寛永 6 年からの江戸城普請の時は、伊豆からの石船は 45 人乗り 3 艘で準備している。輸送距離と海路が穏やかなため江戸城普請より一回り小型船の使用であった。「小豆島より大坂迄舟路三拾七里」の海路を輸送したのである。藤堂氏は小豆島からの石が運ばれた場合、船を少しも待たせずに石を揚げて船を戻すように指示している。小豆島と大坂間の石船輸送が頻繁に行われており、船の航行に支障をきたさないように留意していたことを示す。

他の大名の輸送状況は不明だが、黒田氏は道頓堀川で石を陸揚げしている。これは小豆島から輸送された石か否かは明らかでないが、石揚場として絵図にも記載されているところから、全ての石をこの場所で陸揚げしたであろう。大坂城に近い場所に石揚場を確保したのである。また木津川と長堀川が合流するあたりの寺島にも石揚場があった。木津川河口から入った船は、いったんここで荷揚げし、その後長堀川を通って大坂城へ運ばれたのであろう。大量の石を輸送したため、何カ所かの石揚場を確保していたのである。

石材輸送の船は、公儀普請の名目で島船が徵発された。室町時代から小豆島船での物資の輸送は多く、早い時期から港が開かれ船が存在していた。つまり石船の確保が容易であった。島船による石輸送が容易であることは諸大名にとって魅力であり、そのため小豆島に石丁場が多く拓かれたと考えられる。

では輸送に係る経費はどれくらいであろうか。中川氏は小海村庄屋と談合して、山出しから船での輸送にかかる費用を銀 22 貫勘とし、「でんぼう」まで運ぶことにしている。つまり 62 個の石の輸送賃が銀 22 貫勘であった。この輸送にあたり大坂町人が関わっている。また藤堂氏は「長さ一丈表三尺五寸」の石 4、50 個を、一個銀 68 勘で伝法まで輸送している。八軒屋までの輸送賃は「7 尺、6 尺つら 3 尺 5 寸四方」の石一つにつき 35 勘であった。石の大きさや陸揚げ地により輸送賃は異なったのであろうか。

(5) おわりに

大坂城築城が終えた後、各石丁場には多くの残石があり、残石は勝手に搬出することはできなかつた。黒田氏は石の番人を置き幕末まで厳重な監視をした。中川氏は石番を残すか付近の百姓を雇って番をさせた。小海村では細川氏が撤退した後は庄屋の管理下に置かれるが、残石は田畠に残されたままであった。他の石丁場でも同様放置されたままであった。それに対し、土庄村の石丁場は大きく変化していく。寛永9年に改易となった加藤氏の拓いた石丁場は、土庄村庄屋笠井家による預かりとなる。やがて商丁場へと変遷していき、大半の石は商品として島外へ運び出された。

大坂城築城の石丁場と諸大名の関連を考察するだけで無く、大坂城築城後の石丁場の状況と、島の石がどのように活用されていくかを再検証せねばならない。そのことが、島に残された石の歴史を明らかにすることになると考える。

また、石丁場の管理権限を有する小堀政一は、大坂城普請を核として小豆島統治の徹底を図る目的を持っていました。小堀は塩飽島の統治も行うが、そこにも細川・黒田氏の石丁場が存在する。小豆島と塩飽島との関連づけが重要となろう。

(付記)

本稿は「小豆島の大坂城築城石丁場と石材搬出に係る諸問題」を要約のうえ加筆したものである。

【参考文献】

笠井家文書

広瀬家文書

三宅家文書

石井家文書

永青文庫所蔵文書

「中川家記事」(『岡城跡石垣等文献調査報告書』所収、竹田市教育委員会、2011)

白峰旬「近世初期の小豆島・豊島（手島）における石場に関する史料について」(『別府大学大学院紀要』12、2010)

石井信雄・中村利夫「小豆島における大坂城再築石垣石採石石丁場跡について」(『文化財協会報平成23年度特別号』2012)

拙稿「小豆島の大坂城築城石丁場と石材搬出に係る諸問題」(『香川史学』42号、2015)